

[調査研究報告3]

多文化都市バンクーバーの文化遺産

中野耕太郎
(大阪市立大学)

はじめに

本報告では、北米を代表する港湾都市のひとつ、カナダのバンクーバー（Vancouver）市をとりあげ、「文化遺産」(cultural heritage)の多様な意味を考察したいと思います。特に、港湾都市が持つ、国境の外の世界に対する玄関口としての性格と「文化遺産」の関係に注目していきたいと思います。歴史的に港街の多くは、経済の要衝として栄え、独特の景観を発展させてきただけでなく、外国からの人と文化の入口として、常に多くの外国系住民を抱え、また異文化交流の場として機能してきました。このことは、港湾都市の「文化遺産」のあり方にどのような影響を与えてきたのでしょうか。こうした問題関心は日本最大の多民族、多文化社会であり、さらに21世紀にはアジア各地との国際交流の拠点として発展していこうとする大阪の「文化」状況にとっても無関係ではないでしょう。

さて、本報告で取りあげるカナダは、世界でも有数の移民受入国です。1996年の国勢調査によると同国には約497万人の移民が居住し、その数は全人口の17%に達しています。カナダ政府は1970年代のトルドー政権以来、こうした多民族状況を肯定的に捉える政策を推進し、1988年には、「カナダ多文化主義法」が制定されています。多文化主義の本質をトルドーは次のように説明します。すなわち、「(カナダには)ひとつの公的文化というものには存在しない。いかなる民族文化も他の民族文化より優位ではないからだ」と。それは、政府が公的資金を投じて、多様な各民族集団の伝統文化の保護・育成を積極的に担っ

ていく制度なのです（註1）。この多文化主義の大原則に則って、1995年、文化遺産政策全般を管掌するカナダ文化財省（Department of Canadian Heritage）が新設され、翌96年には具体的な規則を包括的に定めた「文化遺産保護法」（Heritage Conservation Act）が制定されています（註2）。

もとより、こうした多文化主義は文化的多様を承認することで国民統合を実現しようとする高度な統治原理を体現するものですが、ナショナルな文化を定義しない制度は、文化遺産政策の現場にいくつもの厄介な問題を残すことになりました。少なくとも、ここでは、いかなる遺跡や伝統が「文化遺産」と呼ぶにふさわしいのかが自明ではないのです。時に問題は、限られた公的資源をめぐって「誰の」文化が支援されるに値するのかという文化集団間の「政治」に転化しかねません。いずれにせよ、「文化遺産」の保護・整備の問題は、しばしばエスニックな用語で自文化の保護を訴える、いわば文化的特殊主義の立場と、公的な承認および援助を实体とする普遍主義としての「多文化カナダ」とのせめぎ合いの中で処理されていくように見えます。

こうした、議論の大枠を踏まえつつ、より具体的に「文化遺産」の状況を把握するために、2003年9月22日から10月5日にかけてバンクーバーで現地調査を実施しました。その際、同市ロータリークラブの重鎮、アントニオ・ティアンポ（Antonio Tiampo）氏の絶大な協力を得て、チャイナタウンを拠点に「アジア」系文化遺産を中心に検証してきました。なお、この調査では、文化遺産の範囲を広く捉え、いわゆる「祭り」に代表される無形文化財も考察の対象としました。また、限られた調査期間により深い認識を得るために、実際に文化遺産の保護・整備に関わりのある人々へのインタビューを数多く行いました。本報告でもこれらのインタビューのうちのいくつかが議論の中核を形成することになるでしょう。

1 多文化都市バンクーバー

まず最初に、バンクーバーの港湾都市としての沿革を概観しておこうと思います。バンクーバー地域は三方を海に囲まれた天然の良港で【写真3-1】【写真3-2】【地図3-1】【地図3-2】気候は西海岸らしく実に温暖（真冬で約3度C、真夏でも18度C程度）で

す。白人の探検隊が到来する 18 世紀末までは、数多くの先住民がこの地に暮らしていました。その後、1870 年代には製材業の繁栄から人口が急増し、1886 年、「市」に昇格することになります。バンクーバー市の発展期は、歴史的に見て、19 世紀末に太平洋が人と「もの」と文化が行き交う新たな文化・流通圏として誕生した時期と符合します。すなわち、アジアからの移民は当初より活発で、1881 年から 1885 年の間には、すでに 1 万 5700 人の中国人がカナダ太平洋大陸横断鉄道の建設労働者として到来し、はやくも 1890 年頃にはダウンタウンにチャイナタウンが存在していました(註3)。またこの頃、バンクーバー・横浜間の定期航路が開かれ、日本人の移民も始まっています(註4)。戦後、特に 1960 年代以降、同市はアジア向けの穀物輸出基地として急激な膨張を見せ、現在、周辺の市域を加えて人口約 200 万人を数えるカナダ第三の都市となりました。

20 世紀に飛躍的發展を遂げた「太平洋」文化・流通圏との深い関係から、今日のバンクーバーは、非常に多くのヴィジブル・マイノリティー人口を抱える都市として、北米社会の中でも異彩を放っています。ヴィジブル・マイノリティーとは「人種的にコーカソイドではなく、肌の色が白くない、先住民以外の人」を指しますが(註5)、バンクーバーでは中国系を中心にそうした人々が 56 万 5000 人、全人口の 30%以上を占めているのです【**図表 3 - 1**】。1996 年国勢調査のデータによると、アジア出身の移民一世代だけを見ても、香港生まれの者が約 8 万 5000 人、中華人民共和国出身者が約 7 万 5000 人、以下、インド(5 万 5000 人)、フィリピン(3 万 5000 人)、台湾(3 万人)、ベトナム(1 万 8000 人)となっています【**図表 3 - 2**】。このことは、同市において他に例を見ない、多文化状況を生んでいて、例えば母語について見ると、2001 年のデータでは、英語話者が全体の 49.4%に過ぎないことがわかります。2 位の中国語はなんと 26.4%に達し、以下パンジャブ語(2.7%)、タガログ語(2.4%)、ベトナム語(2.2%)とアジア系の言語が続きます【**図表 3 - 3**】。太平洋に開かれたカナダ随一の港湾都市バンクーバーにおける、こうした独特の人口構成と歴史、文化状況は、「はじめに」で触れたカナダ国家の多文化主義理念とあわせて、この地の「文化遺産」を考察するうえでの重い前提とならざるをえないでしょう。それでは、バンクーバーの「文化遺産」の現状を具体的に見ていくことにしましょう。

2 「文化遺産」の整備

(1) 先住民文化

バンクーバーの街を歩いていると、小さな公園や観光地の入口などいたるところで、先住民のトーテンポールを目にします。バンクーバー市とプリティッシュ・コロンビア州立大学(UBC)が中心になって、先住民の遺物の保存と先住民文化の普及に取り組んでいます。膨大な先住民の遺物を収集する UBC 文化人類学部は、彼らの住居や彫刻、トーテンポールなどの保存・修復に努めるとともに、独自の博物館を運営して、これを一般市民に広く公開しています。とりわけ博物館の屋外の敷地には、数十メートルの高さに達する巨大な建造物が、実際に利用されていた当時の状態を再現して常設されています【写真3 - 3】【写真3 - 4】。加えて同博物館は、現在も製作を続ける先住民のアーティストを後援する目的で伝統的デザインのほどこされた衣服や装飾品などの展示販売を行っています。

市内屈指の景勝地であるスタンリー公園には、大小8つのトーテンポールのレプリカが設置されています。週末には多くの観光客が訪れ興味深くこれらを鑑賞しています。重要なことは、それぞれのトーテンポールの下に専門家によって書かれた、詳しい写真付きの解説パネルが設けられていることです。興味本位で訪れた人々でさえ、このトーテンポールはいつ頃、どこでどのような祭祀に用いられていたのか、正しい知識を学ぶことが出来るようになっていきます。【写真3 - 5】【写真3 - 6】

あくまで私の感想に過ぎませんが、バンクーバーに遍在する先住民の文化遺産は、必ずしも特定のエスニック集団の文化表象として位置づけられるものには思いませんでした。つまり先住民の遺物は、多様な文化的背景を持つ市民たちが、こだわりなく「バンクーバー的なもの」として、共有できる「文化遺産」のひとつのようです。

これに対し、次に見る中国系住民が推進する「文化遺産」プロジェクトは、少なからず現在志向で都市の再開発事業とも結びついて、幾分エスニック政治の臭いがします。

(2) チャイナタウン再開発事業

ここでバンクーバー市ダウンタウンの地図をご覧ください、チャイナタウンの位置を確認しておきたいと思います【地図3 - 3】【地図3 - 4】。チャイナタウンは、北は Hastings

St.から南は Georgia St.、東西は Gore St.と Carrall St.で仕切られた 500 メートル四方ほどの領域です。写真に見られるとおり、近年、新来の移住者を中心に活況を呈しています。

【写真3 - 7】【写真3 - 8】

さて今日、バンクーバーにおける中国系「文化遺産」のほとんどは、市当局がスポンサーとなっているチャイナタウン再開発事業と密接な関係にあります。この事業の発端は、1971年にブリティッシュ・コロンビア州政府がチャイナタウンを文化遺産の保護が必要な「歴史地区」と認定したことにあります。その後、中国系の各種団体による長い請願活動などがあり、1999年9月の市議会でダウンタウン東部（チャイナタウンを含む）再開発に3年計画で250万ドルの支出を行うことが決定されたのでした。例えば、2001年度には、「チャイナタウン記念公園」（中国系カナダ人の歴史的貢献を記念）の整備に12万ドル、「孫文記念庭園」（Dr. Sun Yat-Sen Park and Garden）に8万ドル、「中華文化中心」に3万ドル（主として、エスニック・イベントのための用地整備）が、バンクーバー市の財源から拠出されています（註6）。

同市は2001年の報告書の中で、この一連の事業の必要性を次のように位置づけています。「提案された公的領域の改善事業は、バンクーバーのチャイナタウンの再活性化を支援し、ブリティッシュ・コロンビア州の成長し続ける中国人コミュニティにおいて、チャイナタウンが占める文化的中心としての伝統的な地位を新たにしようとするものである」と（註7）。特定のエスニック集団の「文化遺産」の保護・整備を行政が積極的に支援していくという、現代カナダ多文化主義の具体的な実践例と見る事が出来るでしょう。なお、事業計画の立案・調整の実務にあっているのは、「チャイナタウン再開発委員会」という公的な組織で、同地区の社会活動家や財界人、市および州等の関連自治体の代表者などが名を連ねています。私が現地調査の折にお世話になった、チャイナタウン・ロータリークラブの幹部の方々の中にもこの委員会のメンバーが数名含まれていました。同ロータリークラブの会員の多くは、香港との通商を中心に太平洋に広がる国際的ネットワークを縦横に駆けめぐるビジネスマンですが、中国系「文化遺産」の整備事業においては、彼らのような中国系財界人がかなりの影響力を持っているという印象を受けました。

（3）中華文化中心

それでは、より具体的にチャイナタウンの「文化遺産」を検証していきましょう。以下、

a) 「中華文化中心」、b) 「孫文記念庭園」、c) 「中華街二千年紀門」を取り上げ、少し詳しく紹介していきたいと思います。

a) 中華文化中心 (Chinese Cultural Center)

Carrall St.と Pender St.の交差点近くにそびえる「中華文化中心」の緑の瓦屋根の建物は、その名の通りバンクーバーの中国系コミュニティの文化的中心です【写真3 - 9】。このビルには、多様な中国系のエスニック団体やその他のアジア人文化グループなどのオフィスが数多く入居しています。最近ではエスニックの壁を越えた一般社会への働きかけも活発で、1998年には、中国系移民の歴史を当時の写真や遺物で展示する博物館を新設し、併せて研究者向けに歴史史料の閲覧が出来る文書館も開館しました。

中国系住民のカナダ社会への貢献をアピールすることも、「中華文化中心」の役割の重要な部分を占めています。とりわけ、第二次世界大戦でカナダ軍に志願した中国系の兵士を記念するメッセージが多く見られ、最近では、「中国系カナダ人軍事博物館」(Chinese Canadian Military Museum) が館内にオープンし、2003年10月の調査時には「中華文化中心」ビル裏手の「チャイナタウン記念公園」に、中国系カナダ人兵士の忠魂碑が建造中でした【写真3 - 10】。また、ビルの正面入口の両側の壁面には、初期の中国人移民と中国系カナダ人兵士の偉業を讃える巨大なレリーフが常設されています【写真3 - 11】。ここに彫りこまれた次の言葉は、「中華文化中心」の存在理由のひとつを雄弁に物語っています。すなわち、「その血と汗と涙がカナダの建国に大きく寄与した、中国人鉄道労働者および、すべての初期の中国人パイオニアたちを記念して、このレリーフを永遠に彼らの記憶に捧げます…」、「このレリーフは、カナダ軍およびすべての連合国とともに先の第二次世界大戦で戦ったすべての中国系カナダ人に捧げるものです。彼らの尽力と献身のおかげで、1947年、中国人はカナダ市民として参政権を獲得することが出来たのです」と。

b) 孫文記念庭園 (Dr. Sun Yat-Sen Park and Garden)

「孫文記念庭園」は「中華文化中心」の南側に隣接した敷地にあります。この庭園は、革命の資金集めの目的で1897年、1910年、1911年と三度バンクーバーに滞在した孫文を記念して作られたものです。1993年の開園以来、アジア外では唯一の明朝様式の庭園として観光客にも大変人気の高い施設で、現在、「チャイナタウン再開発事業」などの資金を

得て整備が進められています。【写真3 - 12】は、庭園入口に設置された孫文の胸像前に立つ筆者と設計者の建築家ジョー・ウェイ (Joe Y. Wai) 氏です。「孫文記念庭園」にこめられた様々な意味をウェイ氏から直接伺うことが出来ました。

この庭園は基本的には均整の取れたオーソドックスな明朝様式の庭です。しかし、よく見ると細部に他の王朝の様式も散見されます。ウェイ氏はそうした混淆を意図的に行ったとのこと。つまり、多様な「中国文化」を可能な限りひとつのものとして表象したいというのです。また、庭園の中には「中国文化」とカナダとの融和的關係を示そうとするしかけもありました。【写真3 - 13】にも写りこんでいる中国の伝統的な奇岩は、いずれも中国から数十隻の船を連ねて持ち込んだそうですが、一方、岩を取り囲んで美しく生い茂る植物はすべてカナダに自生するものとのこと(註8)。

このように、バンクーバーの人々の理解においては、「文化遺産」の整備とは、必ずしも「古いもの」の保存や、純粹に民族的な伝統の移植のみを意味するものではありません。彼らの中には、カナダの地で遠く太平洋のかなたから持ち込んだ自分たちの文化がどのような形で繁栄していけるのか、それを示すこともまた次世代の若者たちが生きていくのに不可欠な「文化遺産」となっていくのだ、という意識があるのです。

c) 中華街二千年紀門 (Chinatown Millennium Gate)

新しい「中華」の再生、あるいは「文化遺産の創出」という意味では、2002年8月に完成した「中華街二千年紀門」は、さらに大きなインパクトを与えるものでした【写真3 - 14】。この門は4つの柱からなる巨大な建造物で、門の下を路面バスが通るといふ他の中国外の中華門に例を見ない規模となっています。設計者は「孫文記念庭園」と同じくジョー・ウェイ氏で、こちらについても完成までの苦労話を聞くことが出来ました。門の装飾の多くには最新のセラミックが用いられており、黄色い屋根の部分は特殊なラミネート製で古くなることがないそうです。伝統的文化の形式と最先端の建築技術の融合が基本コンセプトにあったのです。しかし、ウェイ氏によると、そのこと以上に苦心したのは、ひとつの「中国」をどのように表象しうるかという問題だったそうです。言うまでもないことですが、バンクーバーに住む「中国人」は、決して一枚岩の集団ではありません。香港からの移住者、台湾出身者、そして中華人民共和国から来た人々など、その文化的、政治的背景は非常に多様なのです。実際、そういった問題もあって、「二千年紀門」のデザインが

最終的に決定されるのに 20 年以上を要したといえます。完成した門の最も印象的なところは、梁の部分にはめ込まれた美しい陶板でしょう。ここには、中国に住む七民族の若者が民族衣装姿で色鮮やかに描かれています【写真 3 - 15】。また、門を守る狛犬は、バンクーバーの中国人社会の中では少数派である、中華人民共和国の寄贈を受けています【写真 3 - 16】。さらに、「二千年紀門」の礎石には「弘揚中華文化促進世界和平」(中華文化が発展すれば世界は平和になる) という金色のパネルを見ることが出来ます【写真 3 - 17】。多様な中国系住民の総意としてこのチャイナタウンの「文化遺産」を守り育てていこうという強い決意が感じられます。

「中華街二千年紀門」の周辺は、新しい記念物の建造だけでなく、歴史的な景観の保護も同時に進められています。例えば、ペンダー通りに並ぶ古びた建物群がそうです【写真 3 - 18】。この建築の特徴は、狭い間口と 4 階建てという縦長の形状、そしてラテン風のバルコニーです。19 世紀末にはサンフランシスコなど西海岸諸都市でよく見られた様式で、中国人移民が好んで滞在したといわれます。この地区では、ほぼ 100 年前そのままの形で保存されています。

また、チャイナタウンの発祥の地である「上海小路」(Shanghai Alley)も 2002 年 2 月、公的な資金援助を受けて、美しく整備されました【写真 3 - 19】。19 世紀後半当時の非常に狭い路地が正確に再現され、加えて、観光客向けに中国系カナダ人とバンクーバー・チャイナタウンの歴史を紹介するパネルが常設されています。また、「上海小路」歴史地区の中心部には、1983 年広州で発見された前漢時代の鐘のレプリカ(広州市寄贈)が設置されていて、2000 年を超える中華の歴史との一体感を表現しようとしているようです(註 9)。この前漢の鐘の鐘楼部分には事業の後援者が列挙されています。中僑互助協会(Chinese Benevolent Association of Vancouver)、統一中国人コミュニティ福祉事業協会(United Chinese Community Enrichment Service Society)、シルクロード事業団、バンクーバー・広州友好協会、カナダ連邦政府、ブリティッシュ・コロンビア州政府、バンクーバー市、広州市、中国系カナダ人軍事博物館。ローカルなエスニック団体と国際的な民間交流組織、そして、市、州、連邦の三レベルの行政が連携して進められた事業であることを示すものです。【写真 3 - 20】

3 無形文化遺産とアイデンティティー

バンクーバーの文化遺産を考えるうえで、無視できないもうひとつのカテゴリーがあります。それは、無形文化財、わけでも重要なのは各種の「祭り」(festivals)です。例えば、日系住民の場合、毎年8月にチャイナタウンの北隣のパウエル・ストリートで「パウエル祭り」というエスニックな祭りをを行い、太鼓や空手、日舞のパフォーマンスなどを催しています(註10)。ところで、このパウエル・ストリート界隈は、戦前には多くの日系移民が住み「日本人町」と呼ばれていましたが、今ではほとんど当時の面影を残すものはありません。日本人の住宅や店舗はバーナビーやリッチモンドといった郊外に拡散してしまい、チャイナタウンのようなモニュメントも見当らず、むしろ荒廃が進んでいるようです。目に見える有形の文化遺産に乏しい日系人にとって、年に一度、かつての「日本人町」に帰って参加する「パウエル祭り」はかけがえのないものとなっています。すなわち、ひとつの文化集団としてのアイデンティティーを保持するうえで欠くことの出来ない「文化遺産」となっているのです。

この他に、全市規模で毎年行われるフェスティバルに「バンクーバー・アジア文化遺産月間協会」(Vancouver Asian Heritage Month Society: 以下VAHMSと略記)が主催する*Explore Asian*というイベントがあります。祭りの規模、編成、理念、また社会的認知の度合い、いずれをとってもバンクーバーのエスニック・フェスティバルの中で群を抜いた存在で、本報告でも少し詳しく取り上げることにします。

VAHMSは毎年5月をアジア文化月間とし、1ヶ月間をとおしてバンクーバー各地で、アジア人アーティストによるコンサートやパフォーマンス、映画の上映などを行っています。出演者は、地元バンクーバー出身のものやアジア系アメリカ人、あるいは京劇の踊り手ほかアジア各地域から招待された人々など実に国際的で、表現様式のジャンルも多様です。ちなみに*Explore Asia 2003*最大の目玉は、ニューヨーク在住の中国系アメリカ人ジャズ・サクソ奏者、フレッド・ホ(Fred Ho)のコンサートでした。彼は中国の伝統楽器でデューク・エリントンを演奏したり、中国系アメリカ人を題材とした史上初めてのオペラをニューヨークで上演したりと、現在、世界的な評価を受けている音楽家です。

ところで、VAHMSの活動は、中国人や日本人といった特定の「ナショナルティー」を代表するものではありません。彼らが目指すのは「パン・アジア的な芸術と文化を祝う」

ことです(註11)。 *Explore Asia 2003* のパンフレットの見開きで VAHMS 会長のビバリー・ナン(Beverly Nann)は次のようにフェスティバルの目的を語ります。すなわち、「我々は『アジア的なもの』(“ Asianness ”)とは何かという論争に和解を与え、そして、しばしば無視されることが多いけれども、現代世界の文化と文明に深い影響を与えてきたアジアという地域にスポットライトを当てることを試みようとしている」のだと(註12)。ここでいう、地理的な領域としての「アジア」には、日本や中国といった東アジアやベトナム、インドネシアなどの東南アジアだけでなく、イスラム圏を広く含むインド、パキスタン等の南アジア、アフガニスタンやカザフスタン等の中央アジアも当然含まれてきます(註13)。率直に言って、日本で日常生活を送る中では、例えばアフガニスタンの人々と日本人が何らかの文化的共通性を持っていると感じることは稀なのではないでしょうか。しかし、VAHMS は近年、むしろイスラム文化を「アジアの文化遺産」の重要な柱と位置づける姿勢を強めています。それは、9.11 テロ後の非欧米世界への政治的圧迫に対する直截な抗議の意味も込められています。テロ直後のフェスティバルとなった *Explore Asia 2002* では、パンフレットの表紙に「アジア文化」を代表するモチーフとして、タージ・マハル廟のモスク内壁のアラベスク彫刻が選ばれたのでした【写真3-21】。もっとも、このパンフレットを手がけたのは、中国人デザイナーで、実は中心部に付された装飾的なアラビア文字を読めなかったために、この部分があやまって上下さかさまになっているそうです。このような「アジアの文化遺産」を私たちは、どのようなものと考えていけばよいのでしょうか。

ここで、若干 VAHMS 運動の系譜をさかのぼって見ておきたいと思います。この活動のそもそもの起源は、1970年代アメリカのいわゆるエスニック・リバイバルにあります。当時、公民権運動の文脈からアフリカ系アメリカ人の「文化遺産」をアピールする活動が盛んに行われましたが、他の多くのエスニック集団もこれに触発されて「自文化」の保存、あるいは再生に熱心に取り組むようになりました。そんな中、1979年にロサンゼルスのアジア系アメリカ人のグループが5月を「アジア文化遺産月間」とする運動をはじめると、その動きは瞬く間に全米各都市に伝播し、時の大統領ジミー・カーターがこれを公式に承認するにいたりました。カナダにはやや遅れて入り、1993年トロントにはじめて「アジア文化遺産月間」の組織が結成されました(註14)。これらは、いずれも自然発生的かつ完全に自立した草の根の運動で、バンクーバーの場合も地域の社会活動家が中心になって8年前にVAHMSの活動を立ち上げています。現在は恒常的なオフィスを前述の「中華文化中心」

ビル内に構え、UBC のアジア人留学生等のボランティアにも助けられながら、活発にイベントを展開しています。今回の現地調査期間中には、このオフィスを訪れる機会に恵まれ、ディレクターのイミタス・パハル (Imitaz Pahal) 氏にインタビューすることが出来ました。以下、氏との対話の中にバンクーバーにおける「文化遺産」の意味を探ってみようと思います。

1 時間以上に及んだパハル氏とのインタビュー中で、特に重要と思われたのは、私が投げかけた相互に関係する次の3つの問いに対する氏の答えでした。

日本文化や中国文化といった既存のナショナリティーと「アジア的なもの」との関係はどう理解されているのか？ VAHMS が称揚する「アジア文化」とは、実際にアジアに存在する固有の諸文化とは異なり、むしろ新たに創出しようとするアイデンティティーを意味しているのではないか？ 「文化遺産」という言葉を使うとき、日本では普通、考古の遺物や歴史的景観など「過去」から受け継いだ「文化」を想起しがちであるが、VAHMS などに顕著な積極的に新しいものを作っていこうという志向はどのように理解すべきか？。

これに対するパハル氏の答えは概ね次の通りでした。「アジア各地の多様なナショナリティーは、互いに対話しあうことでひとつのアジア文化に融合すると考えます。先の *Explore Asia 2003* で好評であった、日本人と中国人の書道家が同時に同じ『書』を書いていくというパフォーマンスはそうした試みのひとつでした。新しい環境の中で、アジアという概念もまた不断に再定義されていくものと理解しています。…そのことと関連して、“新しい”文化遺産という問題にもお答えしたいと思います。まず元来、文化財概念とは過去のみを指すものではありません。文化遺産は創出するものでもあるのです。なぜなら、今日の創造は、明日の文化遺産となるからです。私たちはただ単に文化財を眺めているだけではいけないのです。自ら文化財を作り出していくのです。…たしかに、私たちが作り出そうとしているのは、すこぶるカナダ的アジアかもわかりません。しかし、文化とは常に環境から影響を受けるものではないでしょうか。私たちの文化とは部分的には、私たちが何処から来たのかということに規定されていますが、同時に、私たちが今何処にいるのかということにも左右されるのです。その二つは混ざり合って存在しているのです。(註15)」

先に見たように、現代のカナダは、いかなる民族・人種集団の文化も差別せず、等しく支援していこうという多文化主義を国是として掲げています。しかし、ここではそれぞれの文化集団(エスニック)のアイデンティティー自体がすこぶる流動的で、例えば、「中国」

文化とか「アジア」の文化遺産などといわれる場合でも、その内実と境界は常に交渉の過程にあると見るべきなのかもしれません。パハル氏自身は東アフリカで生まれ育ったインド人で、若くしてカナダに渡って来たそうですが、「文化遺産」の問題は、彼のような複雑な文化的背景を持った多くのアジア系カナダ人にとって、今現在、自分達がカナダの地でどのような存在たりうるのか、また将来、自分の子供たちがどのような人生を送っていいのか、という問題と密接に関わっているのです。

こうした「アジア文化遺産月間」の運動は、今日、多文化主義カナダにおいて十分に公的承認を受けたとあってよいでしょう。2001年12月、カナダ連邦上院は、5月を「アジア文化遺産月間」とする決議を採択し、2002年5月には、カナダ文化財相シーラ・コップス（Sheila Copps）が、これを認める公式宣言に署名しています。コップ文化財相は言います。「カナダでは、文化的多様性が我々全員を、無数の方法で社会的、政治的そして経済的に豊かにしてくれる。『アジア文化遺産月間』は、すべてのカナダ人にとって様々なアジア文化の美と知を祝う理想的な機会である。またそれは、アジア系カナダ人達が我々のコミュニティと我々の国に対して成してきた多大な、そして多様な貢献を認識する機会を与えてくれている」と（註16）。*Explore Asian 2003*のプログラムには、フェスティバルのスポンサー名が列記されています。ここにも、カナダ連邦文化財省、ブリティッシュ・コロンビア州芸術協議会、バンクーバー市といった行政機関が、マクドナルド社やパンパシフィック・ホテル社、CBS テレビなどの民間企業とともに、運営資金の提供者として名を連ねているのです（註17）。

むすび

現地調査期間が終わろうとしていた頃、かねてからインタビューを申し込んでいた、中国語ラジオ放送局、「華僑之聲」(AM1320)の役員ヘンリー・ファティガン(Henry Fetigan)氏に会うことが出来ました【写真3-22】。ファティガン氏はイギリス出身の白人です。40年以上前に英系銀行の香港支社に赴任したのがきっかけで、その後バンクーバーに移住したそうです。以来数十年間、中国系カナダ人コミュニティの中で生活し、現在は中国語と中国文化を媒体とする放送事業にたずさわる異色の人物です。母語と出身地文化の保持

の問題やカナダ多文化主義の性格などについて、多くの興味深い指摘をえられましたので、最後にそのいくつかを記して結びにかえさせていただこうと思います。

「英語とフランス語を公用語とするカナダで、中国語のラジオ放送を行うことにはどのような意義があるのですか。」インタビュー冒頭でのぶしつけな質問に対するファティガン氏の答えは、これまでエスニック集団内部の感情や論理を主に調査してきた筆者にとっては、ある意味で非常に新鮮なものでした。ファティガン氏は中国語放送には二つの意義があると指摘されました。ひとつは、メインストリームのヨーロッパ系カナダ人の特に若い世代に、自分のものとは異なる言語と文化が存在すること、すなわち、世界は多様な文化によって構成されていることを教育するのだといえます。そして、今ひとつのより重要な意義は、具体的に香港や台湾での生活情報と雇用やビジネスの機会を提供することだと答えられました。ファティガン氏によれば、一世世代の帰国者やカナダ生まれの二世で仕事を求めてアジアを目指すものも決して少なくない、むしろ香港出身者の多くは、あたかも中国とカナダという二つの社会に同時に生きているかのように、太平洋の横断を繰り返しているとのこと。バンクーバーのような港湾都市では、トランス・パシフィックな人と文化の移動は、我々の想像を超えた規模で日々行われているのです（註18）。

そうした移動する人々が故郷から持ち込み、あるいはカナダの地で創出する「文化遺産」を積極的に保護していこうとする多文化主義。この制度に対するファティガン氏の見解は単純明快でした。すなわち、多文化主義の本質は「税金の使い方」の問題なのだ、と。つまり、マイノリティーの文化に公金を支出することは、教育や医療への助成と同じく福祉国家としてのカナダ政府やバンクーバー市政の存在意義を明確にしているのだという指摘でした。言い換えれば、アメリカよりもかなり高い課税に正当性を与え、資産を持った華僑やインド系の企業を誘致する手段にもなっているということです（註19）。このようにファティガン氏の議論にも、移住者の文化的特殊主義に共感する価値観と、市民的統合の源泉たる多文化主義の普遍的価値とが、あたかも両立可能なように隠顕しています。

以上、港湾都市バンクーバーの「文化遺産」について、主としてアジア系のエスニック集団の活動に光を当てながら概観してきました。多文化主義を指導理念とする行政の対応が、文化的特殊主義と普遍的統合のせめぎ合いの中で、適切に機能してきたのかどうかは、評価の分かれるところでしょう。しかし、ナショナルな文化コードが厳然と存在し、移民やマイノリティーに同化を迫るアメリカ合衆国の社会が恒常的な民族間、人種間の対立を

抱えている状況に比して、バンクーバーをはじめとするカナダの大都市では、そうした深刻な対立が見えてこないのも事実です。バンクーバー市が実践する多文化主義の文化財政策が日本の状況に応用できるか否かは、今後さらなる検討が必要でしょうが、同じくアジア各地に開かれた港湾都市として、今後ますます外国系住民の増加が見込まれる大阪市にとっても、ひとつのモデルケースになりうるものと考えます。

註

- (1) Richard J. F. Day, *Multiculturalism and the History of Canadian Diversity* (University of Toronto Press: Toronto, 2000); David Channells, *The Politics of Nationalism in Canada: Cultural Conflict since 1760* (University of Toronto Press: Toronto, 2001); 吉田健正『カナダ 20 世紀の歩み』彩流社(1998 年)225 ページ。
- (2) http://www.canadianheritage.gc.ca/pc-ch/legislation/act_e.cfm; 「文化遺産保護法」の全文は次の web site で閲覧可。
http://www.qp.gov.bc.ca/statreg/stat/H/96187_01.htm
- (3) Kay Anderson, *Vancouver 's Chinatown: Racial Discourse in Canada, 1875-1980* (McGill-Queen ' s University Press: Montreal, 1991), pp.34-72.
- (4) 綾部恒雄、飯野正子編『カナダを知るための 60 章』明石書店(2003 年)199 ページ。
- (5) 吉田、前掲書 331 ページ。
- (6) City of Vancouver, Administrative Report, RTS No. 2217, July 23, 2001, on <http://www.city.vancouver.bc.ca/ctyclerk/cclerk/010726/pea1.htm>
- (7) Ibid.
- (8) Interview to Mr. Joe Y. Wai.
- (9) “ Story of Han Dynasty Bell ” by Chinese Benevolent Association, on http://64.177.65.230/cv/html/en/panel_09.html
- (10) 「パウエル祭り」については以下の文献に詳しい。山田千香子『カナダ日系社会の文化変容 「海を渡った日本の村」三世世代の変遷 』御茶ノ水書房(2000 年)244-246 ページ; 和泉真澄「『歴史』と『コミュニティ』の復権 『パウエル祭』とバンクーバ

「日系カナダ人」, 立命館大学日系文化研究会編『戦後日系カナダ人の社会と文化』不二出版(2003年)所収。

(11) Vancouver Asian Heritage Month Society (HP), on <http://www.ahm.bc.ca/>

(12) Event Guide Pamphlet of *Explore Asian 2003* by Vancouver Asian Heritage Month Society (2003), p.2.

(13) Vancouver Asian Heritage Month Society (HP), Introduction, on <http://www.ahm.bc.ca/introduction.html>

(14) Ibid.

(15) Interview to Imitaz Pahal, October 1, 2003.

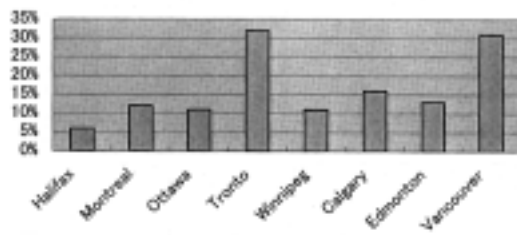
(16) Vancouver Asian Heritage Month Society (HP), Introduction, on <http://www.ahm.bc.ca/introduction.html>

(17) Event Guide of *Explore Asian 2003*, p.1.

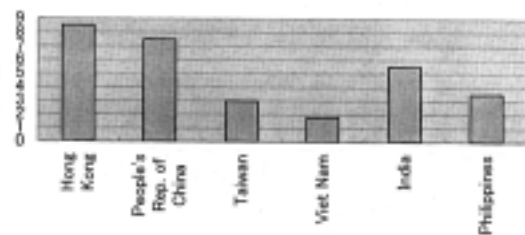
(18) Interview to Henry Fetigan, October 4, 2003.

(19) Ibid.

図表3-1 カナダ都市人口に占めるヴィジブル・マイノリティー(1996年)

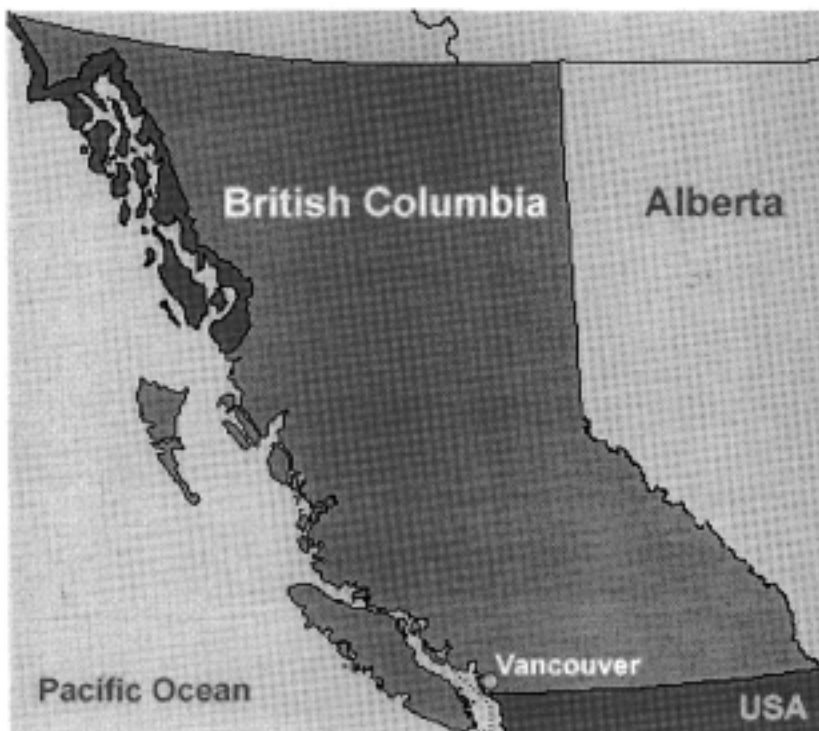


図表3-2 バンクーバー在住のアジア系移民人口(万人: 1996年)

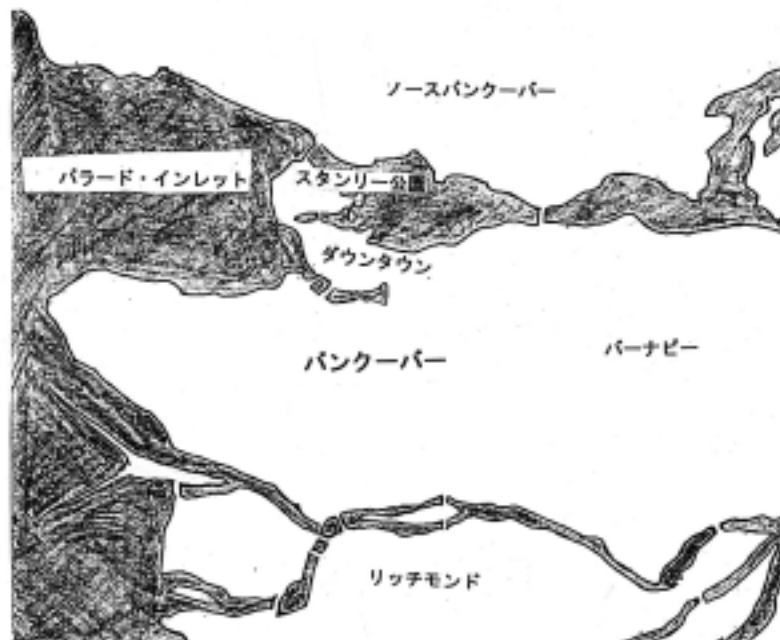


図表 3-3
バンクーバー住民の母語 (2001 年)

		人口	構成比
モノリンガル住民総数		52 万 8910 人	
母語	英語	26 万 1365 人	49.4%
	中国語	13 万 9865 人	26.4%
	パンジャブ語	1 万 4290 人	2.7%
	タガログ語	1 万 2665 人	2.4%
	ベトナム語	1 万 1640 人	2.2%
	フランス語	8850 人	1.7%
	スペイン語	8065 人	1.5%
	ドイツ語	7090 人	1.3%
	イタリア語	6560 人	1.2%
	日本語	5885 人	1.1%
	韓国語	5400 人	1.0%
	ヒンズー語	4580 人	0.9%
	ポルトガル語	3125 人	0.6%
	ベルシア語	2995 人	0.6%
	ポーランド語	2785 人	0.5%
ロシア語	2590 人	0.5%	
ギリシア語	2570 人	0.5%	



地図 3-1 カナダ太平洋岸とバンクーバー



地図 3-2 バンクーバー



地図 3-3 ダウンタウンとチャイナタウン



地図 3-4 チャイナタウン

中野報告 図版 (写真)



3-1 カピラノ山 (ノース・バンクーバー) からダウンタウンを撮影



3-2 バンクーバー市ダウンタウン



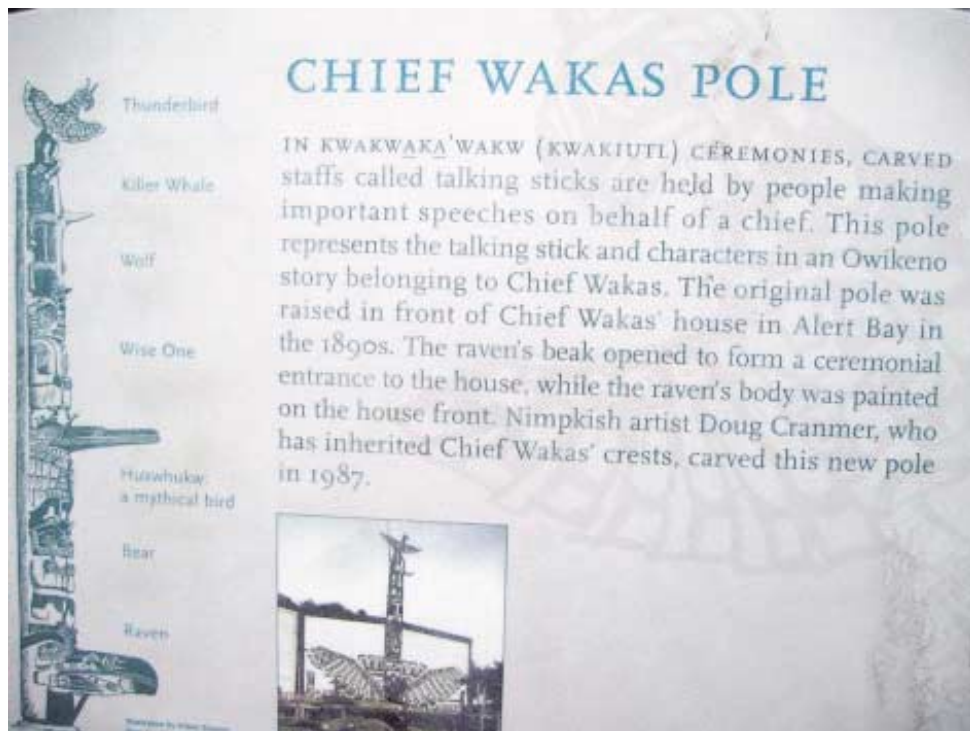
3-3 先住民のトーテンポールと住居 (UBC人類学博物館)



3-4 先住民の彫刻 (同上)



3-5 スタンリー公園のトーテンポール群



3-6 トーテンポールの解説パネル

3-7 チャイナタウンの風景



3-8 同上



3-9 中華文化中心



3-10 中国系カナダ人の忠魂碑（建設中）



3-11 中国人移民のカナダへの貢献を描くレリーフ



3-12 ジョー・ウェイ氏と筆者（「孫文記念庭園」孫文像前にて）



3-13 孫文記念庭園



3-14 Chinatown Millennium Gate



3-15 中国七民族の姿が描かれた陶板



3-16 中華人民共和國國務院に寄贈された狛犬



3-17 Chinatown Millennium Gate の礎石に付されたプレート



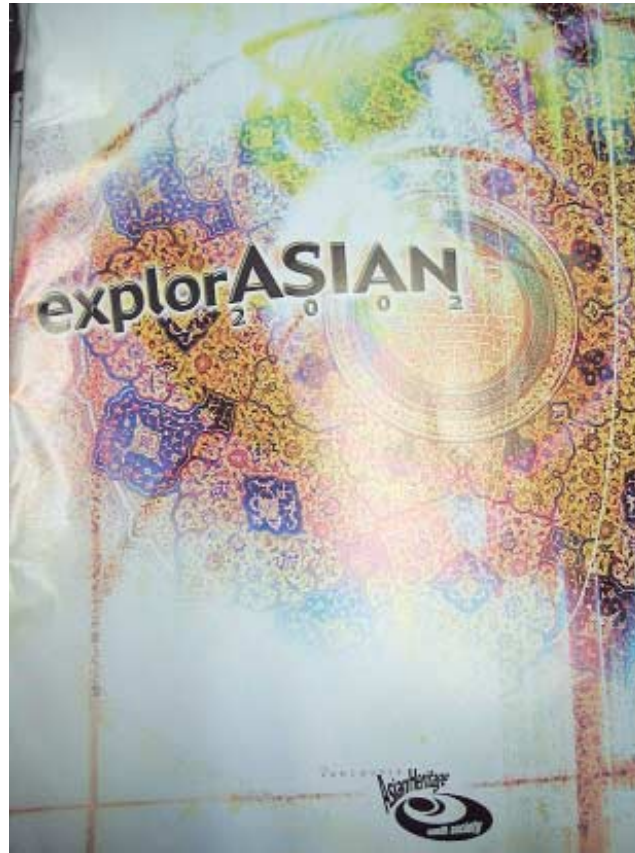
3-18 チャイナタウンの歴史的景観



3-19 Shanghai Alley の整備



3-20 Han Dynasty Bell



3-21 Explore Asia 2002 のプログラム表紙



3-22 ヘンリー・ファティガン氏と筆者（ラジオ局「華僑之聲」ロビーにて）